

「命」を守りたい

その一念だけで政治家になりました。

小中学校では不登校がちで孤独だった僕に、高校時代、恋人ができました。彼女は僕の全てでした。やがて彼女は統合失調症になりました。僕は彼女を病から回復させたくて、臨床心理学を専攻する為に大学へ進みました。

しかし僕は大切な人を守ることができませんでした。出会ってから10年が過ぎたある日、彼女は電車に飛び込んで亡くなってしまったのです。

当時の日本には自殺対策が存在しませんでした。横須賀には大学で学んだ最新の精神保健医療福祉も存在しませんでした。もしも彼女が横須賀ではなく、東京やもっと良い医療や福祉が受けられる街に生まれていたら、今も元気に暮らしていたかもしれません。そもそも発病さえしなかったかもしれません。

けれども人は生まれる時代も場所も選ぶことはできません。

だから「変えよう」と決めました。

いつどこで生まれたとしても誰もが安心して生きていかれるように僕が変えようと決めました。そして会社を辞めて2003年に立候補しました。

政治とは無縁でどこの馬の骨とも分からない若造の、それでも必死な僕の訴えを市民のみなさまは受け止めて下さいました。そして当選することができました。

すぐに僕は全力で走りだしました。

全国の自死遺族の仲間たちやNPOと10万人の署名を集めて国会に働きかけて、2006年に自殺対策基本法の成立を実現しました。市議会ではゼロからあらゆる対策を提案し、5期20年間、ほぼ全ての提案を実現してきました。

彼女が亡くなった2002年(僕が市議になる前年です)、横須賀市の自殺者数は過去最悪の108名でした。それが2019年には過去最少の54名と、50%も犠牲者を減らすことができました。コロナ禍の3年間、全国の自殺者数は増えていますが、逆に横須賀ではこの2年間、ほぼ過去最少に減少しています。

こんなにも自殺の犠牲者を減らすことができたのは必死に働き続けた成果ですが、無所属かつ無党派でひとりきりの僕がここまでがんばることができたのは、あなたが僕を信じて、そして5回も当選させて下さったおかげです。

いくら自殺が減っても、亡くなってしまった命は決して帰ってきません。その悲しみをもう誰にも体験してほしくありません。だから僕は20年前と同じ気持ちで今も全力で働いています。

これまでも、これからもずっと僕は「命」を守り続けます。



藤野英明